

モーツァルト雑感

(言葉と華嚴思想の視点から)

佐藤 幸三

もう二十年以上も昔のことになるが、『在』という文芸同人誌を発行しているサークルに所属し、その主催者であった古庄紋十郎という人に出会った。月々の例会の出席はいつも二、三人と少なかったが、古庄さんはそうしたことに不平を言うでもなく、必ず最初に来て同人を温かく迎えていた。残念ながら腎臓の病で四十二歳という若さで亡くなったが、生前もその貴重なはずの時間を惜しみなく同人誌のために捧げていた。会の運営はもとより、各同人の作品を丹念に読み込み、的確な批評を与えていたことは人間としての誠実を物語っていた。たった二人きりのときに、私がたしか断りもなく送りつけた二百枚以上にもなる創作原稿に目を通して下さっていて評価されたことにはひどく感銘を受けた。

生前、その古庄さんが最後に精魂を込めた主題がモーツァルトだった。『在』第三十七号、第四十号、第四十一号、第四十二号と立て続けに掲載された「ドン・ジョバンニ」、「フィガロの結婚」を最近改めて読み返してみた。活字を追っている間、古庄さんの鼓動と息遣いを感じた。それほど文章には気迫がみなぎっていた。

こういう前置きをしておいて情けないことではあるが、私はモーツァルトの歌劇を通して聴いたことがない。国立音楽大学の卒業公演でフィガロが演目となっているのを知り、実際に演奏会場まで出かけたことさえあるのに、演奏が始まると間もなく退屈して中座してしまった。ヴァグナーは好きだ。ベルリンドイツオペラの上野での「ニーベルングの指輪」公演は四夜を通して通いつめた。だから、オペラを受けつけないという訳ではない。また、器楽曲については折繁く聴いているのでモーツァルト嫌いというわけでもない。では、どうして私の感性はモーツァルトオペラを受けつけないのか。

古庄モーツァルト論の再読を始めたとき、彼の発話として確認したい文言があった。それは、

「モーツァルトは何も語らない」というきわめて短いフレーズだ。

「モーツァルト、生きる喜び」

しばしば引用されているこのフレーズとともに、「何も語らない」という評はモーツァルトを聴くたびに私の頭を過ぎる。

私にとってベートーヴェンは言葉とともにある。「英雄」、「運命」、「田園」、「皇帝」、「大

公、「悲愴」などと題名づけられていれば、曲が流れ始めると同時にそのイメージが湧くが、題名の無い交響曲を聴くとなにかしっくり来ない。なるほどベートーヴェンらしいなとは思いますが、どこか宙ぶらりんな感じがしてすっきりしない。たぶん、それは貴族社会にあって不遇を生きなければならぬという不条理に立ち向かいながら、常に生きることへの意味づけを怠らなかつたベートーヴェンの強烈な生き様と個性が、無名の楽曲には感じられないからだと思う。それに対して、モーツアルトの器楽曲を聴くとき、たとえそれに「プラハ」とか「リンツ」とかの題名が付いていてもそのイメージはまったく湧かない。

最も有名な交響曲第四十番に題名が付いていないのは何故なのか。それはモーツアルトの音楽が本来的に言葉が必要としなかつたからだと想像する。生きる歓びは言葉以前にある。それを言葉に十全に還元することはできない。生はさまざまに意味づけられてきたが、ただ人それぞれの解釈があつたに過ぎない。生という不思議に少しでも近づこうと思うならひとは芸術、宗教に、どうしてもロゴス(言葉)に頼りたいというなら散文ではなく詩に拠るしかない。生の神秘はそうした表現形式を経由して、言葉で解釈することによってしか開かしようがない。面倒なのは、片鱗でも字(言葉)へと降りてこられないような芸術、とくに宗教は却ってひとを惑わすということだ。

心を無にして、言葉を遠ざけなければモーツアルトは聴けない。心に何か考え事があったりすると、その音楽は心に響かない。モーツアルトオペラの台詞が生そのものとしてあつた彼自身によって産みだされたものではないからか、言葉に彩れたモーツアルト音楽は、私にとっては、「モーツアルト」ではないのだ。アリアでは声が音楽となっているかもしれないが、言葉が状況を説明するとなると「モーツアルト」は陰へと身を潜めてしまう。古庄さんは真摯なモーツアルトがなぜ不倫などというものを題材にしたかと発問していたが、モーツアルトにとってはそれも不道德といったような深刻な意味は無かつたのではないかと軽々ながらに想像する。

モーツアルトは、では、言葉以前の世界を音によってどのように描いてみせたのか。小林秀雄は「モーツアルト」を、

「誰でもモーツアルトの美しいメロディイを言うが、実は、メロディイは一と息で終るほど短いのである。或る短いメロディイが、作者の素晴らしい転調によって、魔術の様に引延

ばされ、精妙な和音と混り合い、聞く者の耳を酔わせるのだ」と評している。その音楽にあっては、旋律はなかなか途切れない。ひとつの旋律が終わるかと思える刹那に音は変調を来たし、のびやかに、多元的に引き延ばされ、そして次の旋律へと軽やかに受け継がれていく。このようにモーツァルトは刹那を無限に拡大して展示する。その世界を華厳思想によって溶き開かれた一即一切として理解すると曲解にならうか。一刹那のうちにあら

ゆる音が相即相入してきらびやかに舞めく。音は重々無尽に鳴り響き、その刹那は全体

として円融無碍を成している。終わるかと思えば自在に新たな揺らぎへ展開する音の流れに「とどまる今 nunc stans」はない。その様相を小林は「モーツァルトは、主題として、一と息の吐息、一と息の笑いしか必要としなかった」と述べている。モーツァルトにとって一刹那はあらゆる音がそこで生きる「永遠」であった。「生きる歓び」とは言葉のみによつては決して開かれぬ生そのものが、永遠にまさに触れなるとときに産まれる満ち足りた感情ではないのか。モーツァルトは何事かを主張しようとしぬ。言語活動とはおよそ無縁のその音楽は「生」の実証的語り部なのである。映画「アマデウス」のなかで、サリエリがモーツァルトの楽譜に書き直しが無いのを見て驚き、「神がモーツァルトを通して語っているんだ」というようなことを呟く場面がある。モーツァルトは一般に創作活動に不可欠とされる孤独や、それが可能にする思惟的生活といったものとは無縁であったと想像される。私は、第三十九番、第四十番、第四十一番といった完成された交響曲よりも、むしろ幼少期に創られた楽曲にとくに生の息吹を感じる。ニーチエを視点とするなら、モーツァルトは「生成の無垢」を体現していたとも言えるだろう。まだ成熟していない無垢な時代に創られた作品はなお一層の輝きを放っている。漲るカオスはたったの一音を三世十方に伸ばすというふうほうほうに奔放ほうほうに描いてみせ、結果として一つのコスモスを構築する。まさに神の所業である。モーツァルトは無自覚なままに偉大な真理に触れ、それを表現へともたらしていたのである。

捜したい文言は結局は古庄さんの作品から見出すことはできなかつた。どこかで読んだという記憶だけはあるのだが、古庄さんのモーツァルトへの深い想いに連呼して私のなかで記憶のズレが生じたのかもしれない。無断引用ということになってしまつたら申し訳なく、お詫びしたい。いつかまた古庄さんと会ったら、モーツァルトについて語り合いたい。

二〇二二年二月九日

この小論を古庄紋十郎さんに捧ぐ